



アカシア俳句会



令和五年 冬季・新年俳句会 「句評」 「冬」・「新年」の季語を含む作品一〇五句

一、「特選句」 選定句評

○すまし顔ふくら雀の細い脚

藤井光正

◆雀の脚が細かいことを見つけた作者の目は、自然の中から光るものを見つけ出す力があります。

佐藤茂弘

○手本積み墨守の家訓初硯

戸堂博之

◆毎正月に心鎮めて筆をとる、そのような習慣は身につきませんでした。自分の理想とする姿です。

西村敏治

○病窓の彼方金剛雪纏ふ

加龍恵子

◆金剛山を中心とした雄大な風景、「病窓の」の一語で作者の立ち位置、状況がよくわかるのもいいと思います。

山家由紀

○点滴の音なく落ちて大晦日

加龍恵子

◆白い壁に囲まれた病室で一人迎える元旦。眠れぬ夜に何を思うのか、人生の奥深さをしみじみ感じる名句。

藤井光正

◆年の終わりの大晦日に点滴の雫に人生の時々の出来事に想いを馳せ、感慨に耽っている様子がかがえる。

都 福仁

◆「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」、教えを守った秀作。空しく寂しい時を過ごす作者の心情に共感。

前田秀一

○厳冬も核融合で脱炭素

都 福仁

◆ウクライナ侵攻後、エネルギー問題で核融合発電に興味があったところに、この俳句に出会いました。

三木徳彦

○全力の疾走二世（ひとよ）友逝きぬ

中野亘子

◆最初、深い喪失感が鮮明に甦り、やがて其れは力強い激励に！及ばず乍ら、この名句を生涯の「箴言」として。

網 佑子

○新年の集い来年もと願ひ

山家由紀

◆新年会には、東京、長野から娘、孫たち九人の集いとなりましたが、来年もまた集まってくれたらと願ひながら！

楠野圭子

○大きな葉のはらりと散るや空明きて

網 佑子

◆命を落ち葉に喩えた物語を思い出し、「大きな葉」にことさら大切な人への想いを感じました。

野本展子

○柚子風呂や戯れし子は父となり

前田秀一

◆愚息三人と柚子風呂に入ったことを思い出しました。あれから半世紀。二世代間の表現が凄い。

戸堂博之

◆ぽっかりと浮かんだ柚子、湯につかりながら昔を懐かしんで居られる。私も柚子の香りを頂きました。

加龍恵子

○筆に込む嫁ぐ孫の名祝箸

前田秀一

◆日頃何もしない義父が箸袋に家族の名を書いてくれていた姿が思い出されます。家長の務めと思っておられたのでしょうか？

吉澤志保子

○孫二十歳屠蘇盃の重みかな

前田秀一

◆孫二十歳、嬉しくもあり寂しくもあり・・・、感慨深い気持ちになりました。

吉田以登

二、「編集後記」

手はいつも五体の従者あかぎれて

佐藤多恵子（「京鹿子」俳句会 元同人）

「京鹿子」五〇周年記念『歳時記』（「京鹿子」俳句会

冬季・新年俳句会へのご案内に際し、永年にわたって俳句の世界でご活躍されていた先達のお一人として、佐藤多恵子さんの作品を例句ご紹介しております。

一二月一二日、薬石の効も空しく訃報が届きました。

佐藤多恵子さんは、令和四年「夏季俳句会」（六月）まで模範的は作品の投句のみならず、故中野陽典さんに代わって総括講評（私が選んだ句「特選」・「佳作」）および「気付きのひとこと」など「土生俳句論」を踏まえたご指導をいただいております。

その後、体調を損なわれ「夏季俳句会」をもって退会されたい旨お申し出を受けました。謹んでお悔やみ申し上げます。

◆昨年十一月、都 福仁さんが「会員交流の『場』（ホームページ掲載）に、毎回「兼題」を提出され総括講評などご指導いただいた故中野陽典さん（金剛俳句会 主宰）の遺句作品を紹介投稿されました。

拝見しますと、故中野陽典さんは二〇〇二年七月に「扉」俳句会の大坂句会に初めて参加され、厳しい「選句」審査に応えその作品が「扉」俳句会誌に掲載され続けていました。そして、十五年間の精進の結果、二〇一七年に「扉」俳句会同人として推挙されました。

当会が規範としている土生重次師（「扉」俳句会創設兼初代主宰者）「俳句論」の習得に永年務められた精進の成果としての同人推挙であることに感得するものがあります。

◆「土生重次師俳句論」(**)

* **：小川誠二郎編二〇〇一『抄録・重次俳句論―土生重次、かく語りき―』（復刻）扉俳句会運営委員会

《今回の学び》

俳句は叙事詩である 季語―非凡の一節を支えるもの 百十六頁

先ず、リアリズム(写実・現実)を述べる。それを膨らましてリリズム(抒情)にするために季語がある。感動のもとには季語の働きがある。季語の持つ感情がある。故に、無季俳句は、リリズムを拒否していると言える。

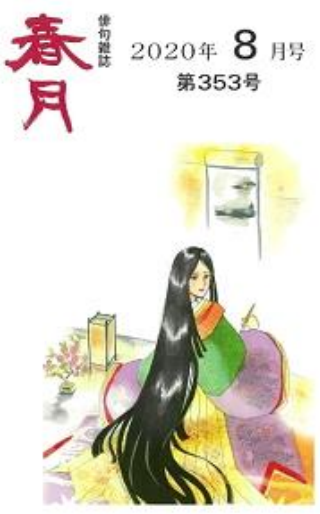
「土生重次一〇〇句」選者・原田紫野氏(*)は、角度を変えて土生重次作品について以下のように解説しておられます。 *：『俳句雑誌』『春月』創刊同人、(公社)俳人協会

《解説》 『俳壇誌上句集二二七 土生重次一〇〇句』『俳壇』七二〇一六二二二頁 本阿弥書店

極短詩系では状況説明は出来ない。作者一人一人の見聞や体験による感得を具体的に表現するしかない。

その中に真や美が内包されていれば、その個人的感動は普遍性を帯びて不特定読者の共感を呼ぶ、というのである。

特に季語は、演繹法(感情表現の集合)ではなく帰納法(いろいろな事例に共通した感情表現)で選定されている。



《前回の学び》

既発行『句評』『編集後記』掲載

◇「俳句はモノに託して心を詠う文芸である」 令和四年『秋季俳句会』

◇「俳句は心や情を直接的に詠ってはならない」 令和四年『秋季俳句会』

編集人 前田秀一